

これだけは知っておきたい「道德キーワード」…【考え、議論する道德】とは

( 出展：光村図書HPより 岡山大学教育学部附属小学校教諭 尾崎 正美 氏)

道德が教科化されるにあたり、「考える」「議論する」というキーワードに注目が集まっています。では、道德科における「考える」「議論する」とは、どのようなことなのでしょう。

「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道德編」では、道德教育において、「よりよく生きるために道德的価値に向き合い、いかに生きるべきかを自ら考え続ける姿勢」を育成することが求められています。そして、道德科では、授業の中で、次の4点を行うことによって、質的転換を図ることが求められています。

## 道德科における学習

1  
道德的諸価値  
について理解する

2  
自己を見つめる

3  
物事を多面的・  
多角的に考える

4  
自己の生き方  
について  
考えを深める

以上のことから、「考え、議論する道德」とは、子どもが常に自己の生き方を見つめながら、みんなで多様な視点から話し合い、語り合うことを通して自己のよりよい生き方を考えていく学習なのだといえるでしょう。

### 「考え、議論する道德」授業の実現のためには

そのような授業の実現のため、私は道德の授業で子どもが自分自身の生き方を常に見つめていくことを特に大事にしています。導入では、普段の自分の考えや言動について振り返り、「どうしてずるい心が出てしまうのだろう」とか「命を大切にすることはどういうことだろう」などのように、自己の生き方（考えや言動）について一人一人が課題意識をもつようにしています。そのうえで教材に出会い、教材の登場人物の生き方について「どうしてそう（道德的行為を）できたのかな」と疑問を感じたり「自分もそういう思いをしたことがあるな」と共感したりしながら、みんなでよりよい生き方について話し合い、自分の思いを語り合っ、自己の生き方についての課題の答えを探していくことを心がけています。つまり、教材の登場人物の考えや言動について話し合っているときも、友達の違いや考えを聞いているときも、子どもの意識は常に自己の生き方の上にあるのです。

このように子どもが自己の生き方を見つめ、よりよく生きたいという願いをもって登場人物や友達の考えや言動にふれて考えていくことが、「考え、議論する道德」の学習において大切にされるべきであると考えます。

### キーワードまとめ 「考え、議論する道德」とは

子どもが常に自己の生き方を見つめながら、みんなで多様な視点から話し合い、語り合うことを通して自己のよりよい生き方を考えていくことを重視した学習。

## これだけは知っておきたい「道德キーワード」…【評価】をどう考えるか

( 出展：光村図書HPより 日本大学講師 富岡 栄岡 氏 )

### なぜ道德科で評価を行うのか

道德の教科化で、評価の方法や在り方が話題となっています。ここではまず、なぜ評価を行うのか、基本的なことから考えましょう。道德教育における評価の意義は二つあります。

- 1 児童生徒が、自分自身の道德的成長を実感し、学習意欲の向上につなげること
- 2 教師が、指導計画や授業改善に役立てること

道德科における評価は、児童生徒の道德的なよさを認め、励まし、伸ばすためのものであることが望まれます。これは、道德性が人格に関わるものであると考えられるからです。

教師は、評価というと、数値による評定を考えがちです。しかし、道德科における評価は、それとは全く異なり、記述式で行います。今回の教科化で、指導要録に道德科の欄が設けられることとなりました。この欄に、道德科の授業内での「学習状況」や「道德性に係る成長の様子」を記述し、評価することになります。

### 道德科における評価方法

道德科における評価では、他の児童生徒と比較することはありません。また、他の教科のように、目標に到達したか否かを見取っていくこともありません。あくまでも、個々の児童生徒に注目して、個人の中でどれだけ道德的成長があったかを見取ることになります。評価方法としては、次のような方法が考えられます。

- 1 観察法  
児童生徒の学校生活の様子を観察することで評価する方法
- 2 面接法  
児童生徒と直接会話をし、その表情や態度、発言内容から評価する方法
- 3 ノートや作文による方法  
道德ノートやワークシートなどに記述された文章や作文から評価する方法
- 4 ポートフォリオ評価  
道德ノートやワークシート、役割演技などを収録した映像、プレゼンなどの成果物を一元化して総合的に評価する方法
- 5 エピソード評価  
児童生徒が道德性を発達させていく過程で発言したことや記述したものを、エピソード（挿話）の形で累積し、評価する方法

これらの評価方法は、それぞれに特徴があり、一長一短があります。したがって、評価方法は一つに限定するのではなく、相互補完的に取り入れることが望ましいでしょう。

道德科における評価は、何よりも、子ども自身が自分のよさに気づき、そのよさを伸ばしていくためのものであるべきだと思います。ぜひ、このことを基盤に据えて、子どもの道德的成長を願い、評価に取り組んでいきましょう。

### キーワードまとめ 「評価」をどう考えるか

児童生徒の道德的なよさを認め、励まし、伸ばすために行うことが望まれる。その際、「学習状況」や「道德性に係る成長の様子」について記述式で見取ること。

## これだけは知っておきたい「道徳キーワード」…【自我関与】とは

( 出展：光村図書HPより 兵庫教育大学大学院准教授 淀澤 勝治 氏)

### 道徳科で求められている「自我関与」とは

道徳の教科化がもうすぐそこに迫っている中、とりわけ注目されている言葉が「自我関与」です。では、道徳科における「自我関与」とはどのようなことなのでしょう。

文部科学省による『「特別の教科 道徳」の指導方法・評価等について(報告)』の中には、「質の高い多様な指導方法」の項のうち、「① 読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習」において、以下のように述べられています。

教材の登場人物の判断や心情を自分との関わりにおいて多面的・多角的に考えることを通し、道徳的諸価値の理解を深めることについて効果的な指導方法であり、登場人物に自分を投影して、その判断や心情を考えることにより、道徳的価値の理解を深めることができる。

これらのことは、従来の授業における「振り返り」であるとか、「価値の一般化」(道徳的価値について、教材中の特定場面だけでなく、自分や自分の生活に広げて考えること)にあたるものと思われます。しかしながら、そもそも道徳の時間において「自我関与」のない授業など成立するのでしょうか。それなのに、あえてこの文言が提起される根拠として考えられるのは、それらが十分に行われていなかったからだと捉えることができそうです。

### 「自我関与」を実現するために教師に求められること

道徳の時間において、子どもたちは三つの対話をします。

- 1 教材との対話** 一つ目は教材との対話です。まずは、教師が教材を範読します。子どもたちに音読させると、読んでいる間は考えることができません。また、必ずしもうまく読めるとは限らず、内容に集中できないことがあります。教師が範読することで、子どもたちは右脳に働きかけ、登場人物に役割取得しながら、イメージ豊かにその物語の中に入り込むことができます。そのことができたならば、子どもたちはそれぞれに登場人物になりきって、物語に描かれている道徳的価値についての自分なりの考えをもちます。
- 2 他者との対話** 教材との対話をしたうえで、今度は他者との対話を行います。先生や教室の仲間の考えに耳を傾けることで、自分とは違った多面的・多角的な考えを知ることになります。いわゆるアクティブ・ラーニングが推奨されている理由もここにあります。
- 3 自己内対話** 他者との対話をしていると、同時進行的に自己内対話を行うことになります。自分の考えと他者の考えを比較検討して、新たなものの見方・考え方を創り出すことになります。これが道徳的価値の創出となります。そこでは当然のごとく「自我関与」が行われているはずなのです。

このような三つの対話を通して、自分とのつながりの中で、ねらいとする道徳的価値に対する見方・考え方が広がり、深まっていく必要があります。そのために、教師に求められることは必然的に決まってくるはずなのです。

#### 【教師に求められること】

- 1 「教材との対話」の場面**  
子どもたちをその物語の世界に引き込むような範読
- 2 「他者との対話」の場面**  
話し合いを活発に進行させる技術(対話的な話し合いをコーディネートする力)
- 3 「自己内対話」の場面**  
自己内対話を進める静かで落ち着いた時間と空間の確保

#### キーワードまとめ 「自我関与」とは

「教材との対話」、「他者との対話」、「自己内対話」を通して、自分とのつながりの中で道徳的価値について考えること。

## 道徳科は何を目指すのか (抜粋)

( 出展：日本文教出版 大阪教育大学 名誉教授 藤永 芳純 氏) 平成27年6月30日発行

(前略)

### 3 道徳教育の目標

現行の記載は(平成20年告示)、昭和33年以来の流れの最新到達点である。改正のたびに、その時々  
の道徳的課題を反映した文言が付加され、現在はワンセンテンスで7行もの、相当に読み取りにくい印  
象の文章になっている。目標をシンプルに抜き出すと、こうである。

「道徳教育は、(中略)道徳性を養うことを目標とする。」(総則)

その道徳性の内容説明が、「(中略)」の部分と、この後の「道徳教育を進めるにあたっては」以下の配  
慮事項の文章である。ここを読むと、「道徳教育の内容」として示されていることの意味を凝縮して網羅  
していることが分かる。ただし、分かりやすく読みやすい文章とは言い難いだろう。

今回の改正ではどのようになったか。

「道徳教育は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、自己の生き方  
を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基  
盤となる道徳性を養うことを目標とする。」(第1章 第1の2)

スリムになったが当然情報量は減った。

自律性、自立性、主体性が強調され、他者との共生が言われているが、個の確立が前面に出ていると  
思われる。個の確立は本来的に社会性を含むと考えるべきであろうが、他者という人間関係についての  
言及にとどまり、集団・社会における広義の社会性についての表現が具体的でないことが印象的である。  
個の確立と社会の有意な構成員としての資質・能力の育成ということ言えば、前者だけが強調された  
印象である。

一方、「教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき」という文言が継承されたこ  
とは重要である。なぜ道徳教育にだけこの文言が明示されているのか。それは、道徳教育が人間として  
の生き方なり方を支える「道徳心」の育成に関わるからである。教師個人の恣意や学校独自の勝手な方  
針、内容で道徳教育が行われることを公教育の立場から否定している。

この枠組みが明示されていることで、偏向した思想教育のそしりを招くことのない状況が実現するこ  
とを願う。

教師として子どもの前に立つことは、それだけで常に既に道徳教育が実践されていることであるから、  
公教育としての枠組みが意識されなくてはならない。

### 4 「道徳科」(道徳授業)の目標

「道徳科」の目標の記載も変更された。(第3章 第1 目標)

「(略)道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的  
諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方  
についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。」

授業目標の説明で、「道徳的な判断力」が先頭に置かれ、「～等」「道徳的実践力」という表現が削除さ  
れたことが目につく。「内面的資質・能力の育成」はどうなったか気になる。だが、最も注目したいのは、  
「自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習」は、「道徳  
的諸価値についての理解を基に」とされていることである。

「価値理解」がなければ学習が成立しないのであれば、何よりも価値の辞書的理解が先行する授業に  
なる。それとも、この「価値理解」は子どもの日常的価値理解のことだろうか。いずれにしても、「考え  
議論する道徳科」とはこうした知的営為の提案のように思える。それでも、価値は「感得する」という  
反論がありそうではあるが。

また、これまで、「道徳的価値の自覚を深める」ことを通しての道徳性の育成を説明してきた。「自己  
の生き方についての考えを深める学習」は、道徳性の構造、その獲得・発達のメカニズムの理論設定に  
変更があるのだろうか。解説書の公刊が待たれる。

ともかく、「賽は投げられた」のだから、時熟を待てない子どもたちのために、最善を尽くすのが我々  
の使命である。